

# 山頭火ふるさと館報

第14号  
令和7年4月

## 「山頭火没後八十五年」 を迎えて

一般社団法人防府観光コンベンション協会  
山頭火ふるさと館  
館長 大本 学司

三月と四月は別れと出会いの季節です。そしてこの季節に、私たち日本人にとつて最も美しさとはかなさを感じさせる桜の花が今を盛りに咲き誇っています。山頭火はその桜を「さくさくら」と「ちるさくら」と詠み、私にはそれが出会いと別れを連想させます。

昨年四月、当館館長に就任し、未熟な私がおそらくこの一年間、運営に携わることができましたのも、学芸員やスタッフ、また、今日まで山頭火ふるさと館を温かくご支援いただいている関係者の皆様や山頭火ファンの方々の励ましのおかげと心から感謝しています。

さて、今年は「山頭火没後八十五年」という節目の年を迎えています。この節目の年が飛躍の年となるように、職員一同、ふるさと館のさらなる発展・充実に向け、展示活動や教育普及活動をはじめ、各種事業の質的向上を図っていききたいと思っています。

まず、今年度最初の企画展として、四月十一日(金)より、企画展「山頭火句集を繙(ひもとく)を開催し、句集『草木塔』の元となつた七句集とその成立について紹介します。山頭火自選の七冊の句集がどのように編まれたのか、そして七冊がどのような性格の句集なのかを詳しく紹介し、山頭火の自由律俳句をより深く知っていただく展示にしたいと考えています。そして、秋には記念企画として、種田山頭火没後八十五年記念企画展「現代にのみがえる山頭火」の開催を予定しています。この企画展では、山頭火をモチーフとした作品や商品等を紹介し、現代の人々が山頭火をどのように解釈し、どう表現しようとしているのかを紐解いていくというものです。皆様には、ぜひとも山頭火ふるさと館に足を運んでいただき山頭火の世界をお楽しみください。

ところで、ふるさと館は今年で開館八周年を迎えます。この間、防府市唯一の文学館として、皆様に親しんでいただけるよう運営を進めてきました。おかげさまで、年間二万五千人前後の方々に来館していただいています。しかし、重要な課題が二つあります。一つは、小中高生に山頭火やその句の魅力をいかに伝え、理解してもらおうかということです。二つ目は、若い世代の人材育成です。今日まで熱心に顕彰・継承活動に尽力されてきた方々の思いを受け継ぐ若い世代の人材

### 目次

|                           |    |
|---------------------------|----|
| 館長挨拶                      | 1  |
| 講演会「山頭火と『層雲』の仲間たち」        | 2  |
| 寄稿 放哉を訪ねて                 | 4  |
| 企画展「山頭火と『層雲』の仲間たち」        | 5  |
| 企画展「自由律俳句で味わう四季」          | 6  |
| 図書・資料受け入れ報告               | 6  |
| 令和六年度書道コンクール              | 7  |
| 第六回フットコンテスト               | 8  |
| 第七回自由律俳句大会                | 9  |
| 常設展示「自由律を開拓した俳人<br>萩原井泉水」 | 10 |
| 種田山頭火 新発見資料               | 10 |
| 今月の一句アーカイブ                | 11 |
| 今後の企画展情報                  | 11 |
| イベント情報                    | 12 |

活用なしにふるさと館の未来はありません。この二つの課題解決に向けて、出前授業や校外学習、地域連携学習の受け入れ等の学校連携、また子ども対象の講座やワークショップ等の開催、さらには自由律俳句大会や書道コンクールなどの開催を通して種田山頭火への興味・関心を高めていくことがふるさと館の発展へとつながると考えています。皆様には、今後とも山頭火ふるさと館への変わらぬご支援、ご協力をいただきますようまずようお願い申し上げます。



講演会

山頭火と

『層雲』の仲間たち

日時 令和六年八月二十四日(土)

場所 山頭火ふるさと館

講師 小山貴子氏(自由律俳誌『青穂』代表)

静岡県生。

一九七三年に『層雲』入門。

元大阪府立高校教員。

著書に『暮れ果つるまで 放哉と二人の女性』、『自由律俳誌『層雲』

百年に関する史的研究』など。

企画展関連イベントとして開催した講演会では、前半には山頭火・尾崎放哉・荻原井泉水の三人について、ともに人生のターニングポイントになった大正末までを詳しくお話いただきました。ここでは、後半の一部をご紹介します。

■『層雲』に身を捧げながら『層雲』を離れた人物

一人は伊東俊二(しゅんじ)という方です。明治四十二年福知山生まれ、本名蘆田甚之助(あしだじんのすけ)。荻原井泉水(おぎわらせいせんすい)とは二十五歳くらい離れています

から、親子くらいの年の差のある人です。この人は昭和五年二十一歳のときに『層雲』に参加します。

昭和十四年に小豆島の南郷庵(みなんごあん)に入ります。その十月に尾崎放哉(ほうさい)の墓参に来た山頭火と会えなかったんです。でも、木下信三という山頭火の研究者が「抱壺と俊二」という題名で書かれています。すけど、海藤抱壺(かいどうほう)という、仙台にいて長く結核を患っている青年俳人と俊二と山頭火、この三人が非常に仲がよくて、手紙で物のやり取りをしたりして非常に親しく付き合っていたということです。

俊二は昭和十四年に南郷庵に入るんですけど、翌年井泉水と呼ばれるんですよ。で井泉水と同居してお手伝いをするようになります。俊二さんってマメな方で、すごく重宝がられまして、井泉水のそばに助手のように寄り添っていろいろ手伝いをしているんですね。で井泉水はほとんどお任せになっていって、俊二に編集全般を任せるようになるんです。昭和十七年には発行人荻原藤吉、編集人伊東甚之助となり、昭和十八年の五月号には井泉水が主幹となつている。だからもう、主宰ではなくて、井泉水は主幹という立場で名前を残す程度で俊二を信頼して『層雲』を任せていこうとするんですよ。で戦争があつて、その後『層雲』が昭和二十一年に復刊します。ずっと俊二に任せきりです。その頃完全に俊二にお任せの、伊東俊二の『層雲』みたいになっているんですよ。

その頃、実はさきほど選というのはすごく大事だということも言ったんですけど、その選を井泉水がしなくなっているんですね。しない

で、池原魚眠洞(いけはらぎよみんどう)に任せようになっている。で、それが表立って出ないんですよ。井泉水選って書いてあるんですけど、実は魚眠洞が代選をしたり添削をしたりということが行われていたようなんです。それに対して、昭和二十三年に『河童』という、八ペーじくらいの簡単な冊子なんですけど、こういうのを創刊しまして若手の人達が『層雲』の批判をし始めるんです。『河童』の人々による批判は、うわさに魚眠洞が代選をしているということに対する不満。それから選者を通すということですね、選者を通せば必ず添削をされて原作とは異なる作品が発表されますよ。そういう選者制度に対する批判。それから『層雲』がもうそろそろマンネリズムに陥っているんじゃないか、非常に古臭いという批判。それから井泉水なり芭蕉なり、無批判に彼らを崇拜する、そういうことに対する若い人達の反感というようなものが起こってきたわけです。でもこの方たち、実は井泉水がすごい好きなわけです。井泉水の考え方はすごい好きやし、井泉水の俳句や彼の選はすごいいいと言っている。井泉水への敬愛の念が強いから、『層雲』が変わってほしいということでも若手の方たちが批判をするんですけど、これはどうも伊東俊二が後ろで糸を引いているんじゃないかと疑われるんですよ。そういうことがあつて、井泉水に『層雲』を返せという動きが出てくるんです。俊二は層雲を紛糾したという責任を取らされて『層雲』を去っていきます。

その後俊二は『連山』という俳句誌を出すんです。けれども、やっぱり続かないんですよ。四号で終わってしまつて、そして俊二は完全に俳句界から姿を消します。

井泉水の心の中には俊二への思い、ひどいことをしてしまつたという思いもずいぶんあつたよ  
うなんです。だから昭和五十年、『層雲』に  
「半世紀層雲社物語」というのがあるんです  
が、そこでどんなに俊二が一生懸命やつてくれ  
たかということを書き綴っています。

そして昭和五十一年は井泉水が亡くなる年  
なんですけど、その三月号に「牀上より一言」  
という遺言が載る。十人に対して遺言を書く  
んですけど、『層雲』を離れてしまつた伊東俊  
二にも遺言を書くんだけど彼からの返事はな  
かつた。私は平成十年に晩年の俊二さんにお  
会いしたんですけど、「昔のことは忘れること  
にしておりませう」と言われ、全然お話できな  
かつた。俊二はその翌々年に、九十歳で亡くな  
られました。



池原魚眠洞は明治二十六年生まれ。この方  
の経歴を見てください。広島高等師範から東  
京高等師範専攻科をでて、愛知県下の旧制中  
学の教員、校長を歴任。要するに魚眠洞は教  
育者であつた。井泉水はこの教育者であつた  
というところにかんがひの期待をしたんではないか  
と思います。この魚眠洞ですね、山頭火がよく

お宅にお訪ねして、そのうちの昭和十一  
年、山頭火が津島にいる魚眠洞を訪問して子  
ども同伴で木曾川に遊びます。こんな感じで  
山頭火ともとても親しい方です。

井泉水はこの魚眠洞を、昭和十五年第一回  
の層雲賞に受賞させています。そして戦後、  
「層雲の筋」を昭和二十三年に書きまして、魚  
眠洞は実は後継者なんだ、ということを表示  
するようになるんです。で、表明しながらも  
実は表向きは魚眠洞の名を出さずに、井泉水  
選としていたということを先程話したんです  
けど、まあ公然の秘密みたいにして、魚眠洞が  
井泉水の代わりに選をしていた。それに対して  
若い人達が反乱を起こした。それを後ろで伊  
東俊二が糸を引いているのではないかというこ  
とで、俊二が追ひ詰められて辞めたというこ  
とは既に触れました。

で、昭和二十七年です。この時初めて魚眠洞  
の名前が出てくるんです。一月号に井泉水と  
共選として選者名で名前を掲載されて、ここ  
からは、今度井泉水は魚眠洞にいろいろ期待  
するようになって、昭和三十四年、七年後には  
は全ての壇を魚眠洞選とするくらい選者を任  
せていくんですね。そうすると実質的に、長く  
魚眠洞が選をしていた。長く同じ人が選をす  
るということは、主宰者としてはちよつと具合  
が悪いことが起こってくるんですね。つまり、井  
泉水は井泉水として素晴らしい人なんだけれ  
ども、身近にあつて丁寧な俳句をみてくれて  
添削をしてくれる人に対する敬愛の気持ち、  
というのは当然起こってくるわけで、どうもそ  
の魚眠洞派、魚眠洞グループみたいなのが出  
来かかっているという雰囲気を感じて、これは  
あかん、ということになり魚眠洞をはずしてい

こうとします。昭和三十七年に井泉水は、上  
級者の方は自分が持つて初心者の方は魚眠洞  
が持つてくれと壇を二つに分けるんですけど、  
それに対して魚眠洞はヒエラルキー的に見上  
げる者と見下ろす者ができてくるということ  
が苦痛であつたと『層雲』に書きます。それに  
対して井泉水が「骨」と「肉」について」と  
いう有名な文章で、そんな考え方はいけない  
だと言ってますけども、そこがなかなかうま  
くいかずに、ついに、昭和四十年に壇を改編す  
ると言つて、魚眠洞一本の選を、選者として  
道はずしていき。そういうことがあつて魚眠  
洞は居づらくなりますので、今度は魚眠洞が  
『層雲』を出ていきます。で、魚眠洞は『視界』  
という雑誌を発行するんですね。昭和四十三  
年の創刊号のところはどう書いてあるか、『河  
童』の人達の主張とよく似てて、要するにもう  
昭和三十年頃、『層雲』がひとつの行き詰まり  
を迎えていた時期だ、ということが言える  
と思います。

井泉水はそこまで信頼していた人をまた失つ  
ていくわけで、彼の胸の中にはやっぱり魚眠洞  
への想いがあつたと思います。昭和五十一年、  
「牀上より一言」に、池原魚眠洞に対しても遺  
言を書く。その最後に、「あの時代は再び来な  
いだろうか」と書いてあるんですね。いろんな  
意味が込められて、あの時代を懐かしむと  
いう思いと、帰って来ないのかという気持ちも  
込められていたと思うんですけども、それ  
に対して魚眠洞は同じ年の八月号、「捨石にな  
ることこそ」というのを書いて井泉水に伝える  
んです。この時井泉水はこの世にはいないん  
ですけど。

「池原魚眠洞へ——」からはじまる十八行四六〇字を何度、いや何十べん読み返したことであろう。そして、その都度、最後の「あの時代は再び来ないだろうか」という箇所に至ると、これもきままつたように声をのまぜずにはおられないのである。(略)ともあれ、このご遺書から私が全霊をもつて受けとめていることは、六十年前先生が志向されたあの俳句革新の一大詩業の今後を負荷させて頂くということである。(略)その昔の先生の理念を今日実現することは不可能に近いほど困難なことである。その不可能に近いことを、(略)お遺しになった自由律俳句を「時代と共に前進する一行詩」に高めることによつて可能ならしめる、その捨石になることこそが、無量の恩師に報ずるただ一つの道だと思ふのである。

自分は井泉水の理念を忘れていない、だからそれを私は引き受けていく、でもそれを一行詩として今後活かしていく、しかも自分が中心になるんじゃないやなくて、自分は捨て石になっていくんだ、という文章を書かれるわけです。そして魚眠洞は自分が生きてる間に『視界』を終刊にして一代で終わらせてしまつて、昭和六十二年に九十三歳で亡くなります。昭和六十二年だったら私が『層雲』に入つていた年なので、もつと魚眠洞のことを知つていたらお訪ねしていろいろお話を聞けたのにと本当に残念に思う俳人の一人です。

寄稿

放哉を訪ねて

小山 貴子

放哉の「咳をしても一人」に出会つたのは大文学二回生の時の確か国文学概論の講義の中だった。私が大学を受験した年は、たつた一度東大の入試が行われなかつた年で、大学紛争も終盤に入つた頃だった。荒れ果てた校舎、校門はバリケードが張られ、授業は断続的で従つて同級生ともたまにしか会わない。無秩序な中に放り込まれて虚無感が漂つていた中で、田林教授の授業は土曜日の午後後に密かに開かれた。ある日、教授が黒板に書いた「咳をしても一人」の句は深く私の胸に刻み込まれた。

「咳」や「一人」の意味するものは何か。この句の持つ孤独とは何かを知りたいと思つた。そのためには放哉とはどういう人物だったのか知りたいと思つたが、資料を入手するところから途方に暮れた。卒論提出期限の半年前に彌生書房の全集が出たのは有難かつたけれども、それでも大きな謎が残つた。放哉はどうして従妹の澤芳衛と結婚できなかったのだろう。どうして東洋生命株式会社を辞めたのだろう。なにゆえ満州まで出かけて、そして一燈園に入つてしまったのか。

調べていくうちに悟つたことは、そう簡単に私にわかることではないということだった。だ

から、時間をかけて少しずつ続けていくしかない。その方法は、自分も自由律俳句を作ることに。放哉に接した人に話を聴くこと。そして、新しい資料を探すこと等々だった。放哉の俳友であり、私の俳句の師でもあつた内島北朗先生は放哉についてはほとんど話して下さらなかつたけれど、句会の席上でポンと肩を叩いて、放哉からのしかも亡くなる直前の葉書をくださったことがあつた。一燈園で苦悩する放哉を支えた住田蓮車さんには比叡山の極楽寺で。姪の森田美枝子さんは妻馨さんに可愛がられ、晩年の芳衛さんとも親しかった。また、芳衛さんのご子息三郎さんも母芳衛のほか放哉と親交のあつた澤静夫(芳衛の兄)についても思い出を語つてくださった。そして、井泉水先生のご子息海一さんは、井泉水秘蔵の放哉句稿を発表する機会をくださった。こうした多くの人々の協力の御蔭で放哉という人間像に一歩ずつ近づいている気がする。

「咳をしても一人」との出会いから半世紀が経つのだが、この句にある深い孤独と動かぬ諦念は、放哉を知るほどにますます強く私の心を揺さぶっている。



大正五年十一月五日上野公園にて 従姉の銀婚式での記念写真(右端が放哉と馨、左端が芳衛夫妻、後列左から二人目が芳衛の兄静夫)

企画展  
山頭火と  
『層雲』の仲間たち

後期展示

会期 令和六年十月四日(金)

～十二月八日(日)～



荻原井泉水が主宰した自由律俳誌『層雲』には全国から多くの同人が集まりました。種田山頭火も『層雲』同人として活躍し、『層雲』を通じて同人たちとの交流を広げました。今回は山頭火が交流をもった全国の『層雲』の仲間たちを、それぞれの作品やエピソードとともに紹介しました。

後期展示では、『層雲』主宰の荻原井泉水(せいせんすい)、新潟の写真家小林銀汀(ぎんてい)、山口生まれの渡辺砂吐流(さとる)、山口ゆかりで初期の『層雲』に参加した兼崎地橙(しゅせう)、福岡の三宅酒壺洞(しゅくどう)、同じく福岡の飯尾青城子(せいじょう)

し)、福岡の炭鋏匠木村緑平(りよくへい)、小郡の国森樹明(じゅみょう)、長府の近木圭之介、『層雲』誌上で俳論も多数発表していた井手逸郎(いつろう)、愛知の池原魚眠洞(ぎよみんどう)、長野の太田蛙堂(あどう)、そして山頭火とともに自由律俳句の代表的俳人である尾崎放哉(ほうさい)の十三人を紹介しました。

企画展(後期)の開催にあたり、以下の方々にご協力いただきました。謹んで謝意を表します。(敬称略・順不同)

- 護国寺
- 神奈川県立神奈川近代文学館
- 小林由美子
- 兼崎地橙孫顕彰会
- 木村緑平顕彰会
- 小豆島尾崎放哉記念館
- 西野善男
- 宗仲夏
- 山口市小郡文化資料館

【後期展示資料一覧】

短冊「椰子の葉の月は五日の葉はぬれてゐる」(荻原井泉水・山頭火ふるさと館蔵)、『層雲』第一巻第四号(層雲社・明治四十四年八月・山頭火ふるさと館蔵)、写真複製「種田山頭火肖像」(小林銀汀・昭和十一年・山頭火ふるさと館蔵)、『句集 残照』(渡辺砂吐流・昭和五十五年十一月・山頭火ふるさと館蔵)、短冊「竿で突く河が田べりの浮き水」(兼崎地橙孫・山頭火ふるさと館蔵)、『層雲』第二十三巻第七号(層雲社・昭和八年十一月・山頭火ふるさと館蔵)、短冊「すゝきかるかや国分寺なら池を廻つて右へ曲る」(三宅酒壺洞・山頭火ふるさと館蔵)、『層雲』第二十一巻第六号(層雲社・昭和六年十月・山頭火ふるさと館蔵)、第一句集『鉢の子』(種田

山頭火・発行所：三宅酒壺洞・編集兼発行人：木村緑平・昭和七年・山頭火ふるさと館蔵)、『年々歳々』(飯尾青城子・飯尾琢磨・昭和三十六年一月・山頭火ふるさと館蔵)、短冊額装「雨ふるふるさとにはだしである」(種田山頭火・山頭火ふるさと館蔵)、『層雲』第二十三巻第九号(層雲社・昭和九年一月・山頭火ふるさと館蔵)、短冊軸装「かべの朝が来た／古里石も眠い」(近木圭之介・護国寺蔵)、『層雲』第二十四巻第五号(層雲社・昭和九年九月・山頭火ふるさと館蔵)、『層雲』第二十二巻第十号(層雲社・昭和八年一月・山頭火ふるさと館蔵)、短冊軸装「ひくく丘影からひばりあがつてゐる」(池原魚眠洞・護国寺蔵)、『層雲』第二十四巻第二号(層雲社・昭和九年六月・山頭火ふるさと館蔵)、池原魚眠洞宛て葉書(太田蛙堂・昭和九年四月二十九日付・山頭火ふるさと館蔵)、色紙軸装「落葉たぐ煙の中の顔である」(尾崎放哉・護国寺蔵)



▲展示風景

企画展  
自由律俳句で味わう  
四季

会期 令和六年十二月十三日(金)

〜令和七年四月六日(日)



自由律俳句は季語にこだわらない俳句ですが、春の花、夏の青葉、秋の木の葉、冬の雪など、四季折々の自然の風物は自由律俳句においても題材となっており、季節感のある句は多くあります。それは、日本が四季の移り変わりのはっきりしている気候であり、日本人がそれぞれの季節に合わせるように暮らしてきた、すなわち生活の一部に四季の移り変わりがあったからだとも言えるでしょう。

今回は、季節を感じる山頭火や他の自由律俳人たちの俳句を直筆資料とともに紹介しています。

【展示資料一覧】すべて当館蔵

○春  
短冊「これから旅も春風の行けるところまで」(種田山頭火)、『花の群落』(伊藤雪男・層雲自由律の会・平成十年)より「季節の速度梅ひらく」、短冊「花吹雪と言はんより木瓜の散る如し」(河東碧梧桐)

○夏  
短冊「ほうたるこい〜ふるさとにきた」(種田山頭火)、短冊「陶窯の火を打ちとめて天の川」(内島北朗)、『一碧楼句集』(中塚一碧楼・巢枝堂書店・昭和二十三年)より「山一つ山二つ三つ夏空」、『ケロイド』(松尾あつゆき・層雲社・平成三年)より「炎天、子の欲りし水がながれている」

○秋  
短冊「年とればふるさとこひつく〜ほうし」(種田山頭火)、短冊軸装「其中庵 住めば柿の実の赤くして」(種田山頭火)、『大空』(尾崎放哉・春秋社・大正十五年六月)より「己に秋の山山となり机に迫り来」、『せきれい』(青木此君楼・白嶺社・昭和三十八年)より「案山子泳いで黄金の波」

○冬  
短冊額「枯草の中の花である」(種田山頭火)、短冊「竹の葉のいちちちやく音たてて霰」(種田山頭火)、掛軸「其中雪ふる一人として火を焚く」(種田山頭火)、掛軸「驛は山のじぐざぐも上州に入る冬の雲」(荻原井泉水)



▶ 展示風景

図書・資料受け入れ報告

令和六年九月から令和七年二月までに寄贈いただいた資料をご紹介します。

【寄贈】

- ▼石井直美様より影絵「わけいってもあおいやま」(石井昭)他十点、『影絵の世界』(石井昭)▼牛久竹男様より書簡「原農平宛て葉書 昭和三年六月二十六日消印」(三宅酒壺洞)他二十五点▼木下信三様より『山頭火大全』(種田山頭火)他四十六点▼高橋正治様より墨書「墓にどんぐり投げつける子のみて詣でる」(大山澄太)他二十二点▼西野善男様より墨書「這松寒く秋の穂高連峰はれる」(三宅酒壺洞)▼防府史談会様より音声資料「郷土が生んだ俳人 種田山頭火」他一点▼水落龍勝様より書額「庵主のねがい」(近木圭之介)、『文春文庫 山頭火』(近木圭之介)他三冊、拓本軸装「松はみな枝垂れて南無観世音」(水落龍勝)他四十一点▼築田和郎様より『禅談』改訂新版』(澤木興道)▼吉野俊夫様より書額「ふるさとの水をのみ水をあび」(富永鳩山)、書額「空へ若竹のなやみなし」(富永鳩山)

【御著編書】

- ▼「青穂」事務室様『青穂』五十四号、五十五号▼富永鳩山様『自由律俳句クラブ群妙』第三十七号▼中原中也記念館様『中原中也研究』二十九号▼日本放哉学会編集委員会様『放哉研究』二〇二五 第七号▼藤津滋生様『朝鮮半島に山頭火がいた? 放浪詩人 金笠キム・サツカ』

令和六年度山頭火ふるさと館  
書道コンクール

応募期間

令和六年八月一日(火)～九月六日(金)

表彰式

令和六年十月五日(土)

審査員

小・中学校教育研究会 国語研修部、高等学校書道担当教員の先生方四名

市内の小学生から高校生を対象に、山頭火にちなんだ言葉課題として書道作品を募集しました。部門を五つに分け、小学校一・二年生「うみ」、三・四年生「うまい水」、五・六年生「青葉」、中学生「山頭火」、高校生「海よ海よふるさと」の海の青さを書道で表現してもらいました。応募数一〇二〇点の中から各部門、防府市長賞(最優秀賞)一名、防府市教育委員会教育長賞(優秀賞)一名、山頭火ふるさと館長賞(優秀賞)一名、佳作二名の計二十五名が選ばれました。また、山頭火ふるさとまつり期間内の令和六年十月五日に表彰式を行い、受賞作品を十月六日から十一月十六日まで展示しました。  
受賞者は以下のとおりです。

小学校一・二年生の部

【防府市長賞】

有富 明莉 大道小学校 二年

【防府市教育委員会教育長賞】

角 蓮之介 勝間小学校 二年

【山頭火ふるさと館長賞】

宗像 華穂 佐波小学校 二年

【佳作】

林 京香 佐波小学校 二年

古谷 芽郁美 右田小学校 一年

小学校三・四年生の部

【防府市長賞】

森田 詩織 勝間小学校 三年

【防府市教育委員会教育長賞】

松若 詩奈 牟礼小学校 三年

【山頭火ふるさと館長賞】

宝本 和慶 玉祖小学校 四年

【佳作】

柳 日芽花 西浦小学校 四年

今村 亘 右田小学校 四年

小学校五・六年生の部

【防府市長賞】

岩崎 杏菜 小野小学校 五年

【防府市教育委員会教育長賞】

有富 美空 右田小学校 六年

【山頭火ふるさと館長賞】

和西 千穂 大道小学校 六年

【佳作】

有富 将志 大道小学校 六年

山根 祐華 華城小学校 六年

中学生の部

【防府市長賞】

下坊江 夢叶 佐波中学校 二年

【防府市教育委員会教育長賞】

田頭 奏音 小野中学校 二年

【山頭火ふるさと館長賞】

富田 羽月 佐波中学校 二年

【佳作】

沼田 奈央子 右田中学校 一年

木嶋 蓮 佐波中学校 二年

高校生の部

【防府市長賞】

原田 強生 防府総合支援学校高等部 三年

【防府市教育委員会教育長賞】

山田 和裕 防府総合支援学校高等部 三年

【山頭火ふるさと館長賞】

升谷 里菜 防府総合支援学校高等部 三年

【佳作】

岩谷 夏希 防府総合支援学校高等部 三年

藤本 豹我 防府総合支援学校高等部 三年



▲受賞作品展示

第六回山頭火ふるさと館  
フォトコンテスト

募集期間

令和六年四月一日(月)～十月三十一日(木)

審査員(敬称略)

坂井譲・入江孝治・櫻井宏明・大本学司

表彰式

令和六年十二月七日(土)

展示

令和六年十二月八日(日)

～令和七年一月九日(木)

昨年度に引き続き、種田山頭火の句を題材とした写真を募集しました。県内外からプリント部門四十五点、メール部門四十一名の応募があり、その中からプリント部門八点、メール部門十一点を受賞及び入賞に選出しました。また、審査後の十二月七日に表彰式を開催し、翌日から一月九日まで市民ギャラリーにて受賞作品の展示を行いました。現在、受賞作品は当館ホームページの企画展・イベント欄に掲載しています。

受賞結果は次の通りです。

プリント部門

【最優秀賞】

山岡 幸雄(山口県)

「ころり寝ころべば青空」

【優秀賞】

内山 英治(山口県)

「もりもりもりあがる雲へあゆむ」

吉野 由恵(山口県)

「山の仏には山の花」

【佳作】

栗田 敦(佐賀県)

「曼珠沙華咲いてここが私の寝るところ」

是枝 克幸(大阪府)

「安か安か寒か寒か雪雪」

久光 美保子(山口県)

「だまつてあそぶ鳥の一羽が花のなか」

【入選】

佐々木 洋子(埼玉県)

「たまさかに飲む酒の音さびしかり」

繁泉 祐幸(宮城県)

「ほんによかつた夕立の水音がそこここ」

メール部門

【最優秀賞】

土屋 恵理(三重県)

「どうしようもない私が歩いてゐる」

【優秀賞】

石川 裕樹(山口県)

「炎天のレールまつすぐ」

笹本 菜穂子(東京都)

「ま夜中のひとり飯あたゝめつ涙をこぼす」

【佳作】

小林 寛久(三重県)

「うれしいこともかなしいことも草しげる」

清水 利章(北海道)

「日ざかりのお地藏様の顔がにこにこ」

堀 将大(岡山県)

「猫もさみしうて鳴いてからだすりよせる」

【入選】

近藤 博明(広島県)

「しづむ陽をまへにして待つてゐる」

坂本 加代(山口県)

「夕焼雲のうつくしければ人の恋しき」

豊田 陽向世(山口県)

「ふるさととはみかんのはなのほふとき」

中嶋 隆弘(山口県)

「お寺の鐘も、よう出来た稲の穂」

野村 昌弘(神奈川県)

「霽れててふてふ二つとなり三つとなり」



▲表彰式の様子

第七回山頭火ふるさと館  
自由律俳句大会

募集期間

令和六年五月一日(水)

～十月三十一日(木)

審査員(敬称略)

富永鳩山(群妙主宰)、久光良一(俳人)、

門田美和子(自由律俳句講師)、大本学司

(当館館長)

表彰式

令和七年二月八日(土)

今回は全国から一般の部一二六〇点、子ども部八九九点の応募がありました。今回は従来の賞に加えて山口県在住者を対象とした「山頭火ふるさと賞」を設け、審査の結果二十五点が受賞、七十七点が入選となりました。受賞作品は以下のとおりです。なお、入選作品は当館ウェブサイトに掲載しています。

一般の部

【最優秀賞】

前を行くあなたがいるから私も一歩

山口県 杉真紀

【防府市長賞】

「飯食うか」母の野太い声で温まる

福岡県 今林快波

【防府市文化協会会長賞】

やさしさを耳に当てれば海

愛知県 野村齋藤

【佳作】

学歴職歴一行の父の喉仏

滋賀県 小見伸雄

母の適当が真似できない玉子焼き

茨城県 貝塚妙子

トマトほおぼる丸ごとふるさと

山口県 中川房子

たくあんと平和かみしめ故郷は春

滋賀県 廣木信子

鯖も大根も煮崩してこそ母の味

宮城県 緑猫

【山頭火ふるさと賞】

ふる里の蟲がざわつく籠の中

山口県 佐伯喜誠

ひび割れたココロにコドクがふき抜ける

山口県 田中流転

頑固という取り残された昭和に生きている

山口県 永富衛

パパ、パパと言いながら葉っぱのおみやげ

山口県 林陽子

船が来たそろそろ砂をはらおう

山口県 藤井みちよ

枯れても残っている棘

山口県 松尾貴

子どもの部

【最優秀賞】

嘘をついたいつもより長い帰路

大阪府 中3 木下愛乃音

【防府市教育委員会教育長賞】

「またね。」がある幸せ

東京都 中3 高橋ももこ

【防府市文化協会会長賞】

父が作る夕飯納豆に焼き魚

群馬県 中3 吉井咲喜

【佳作】

たおれそうでも最初にきりたいゴールテープ

東京都 中3 市川幸汰朗

つらなっている山々がグラフみたいだ

山口県 小5 奥山葉月

疲れ果てた私を時間を追い越していく

東京都 中3 堂下風詠

【山頭火ふるさと賞】

こころがどくんとはねたせみの声

山口県 小2 石川陽大

原爆のきずあと静かにものがたつている

山口県 小6 岡本萌愛

あるいたらあるいたらあなたのまつあほのほそみち

山口県 小5 奥山双葉

勉強机の向こうの窓に秋の夜の月

山口県 中3 源内花鈴

寒い朝に離してくれない布団のやさしさ

山口県 中3 小林勇輝



▲表彰式

常設展示  
 自由律を開拓した俳人  
 荻原井泉水

会期 令和六年四月十二日(金)  
 ～令和七年四月六日(日)

種田山頭火や尾崎放哉の師、荻原井泉水は、二〇二四年で生誕一四〇年を迎えました。その記念として、自由律俳句を開拓した俳人・井泉水についてご紹介しています。

荻原井泉水(おぎわらせいせんすい)  
 明治十七(一八八四)年

～昭和五十一(一九七六)年

本名藤吉。第一高等学校在学中に「一高俳句会」を起し、東京帝国大学卒業後は河東碧梧桐の新傾向俳句運動に参加、明治四十四年には俳誌『層雲』を創刊。『層雲』は碧梧桐が去ると井泉水の個人誌となり、無季自由律を推進。『層雲』は全国に広がり、山頭火や尾崎放哉をはじめとする多くの自由律俳人を輩出することになる。『層雲』を主宰する傍ら、小林一茶や松尾芭蕉の研究にも取り組み、特に一茶研究では多くの遺稿を校訂し研究史に名を残している。

【展示資料一覧】すべて当館蔵

『層雲』創刊号(荻原井泉水・層雲社・明治四十四年四月)、句集『流転しつゝ』(荻原井泉水・聚英閣・大正十三年二月)、句集『皆懺悔』(荻原井泉水・春秋社・昭和

三年十二月)、句集『梵行品』(荻原井泉水・改造社・昭和七年六月)、句集『無所住』(荻原井泉水・層雲社・昭和十年十月)、句集『海潮音』(荻原井泉水・一條書房・昭和十七年四月)、句集『千里行』(荻原井泉水・光文社・昭和二十一年七月)、句集『原泉』(荻原井泉水・層雲社・昭和三十五年六月)、句集『大江』(荻原井泉水・弥生書房・昭和四十六年八月)、句集『四海』(荻原井泉水・文化評論出版・昭和五十一年十二月)、『新俳句提唱』(荻原井泉水・立命館出版・昭和七年七月)、『旅のまた旅』(荻原井泉水・春陽堂・昭和四年九月)、『定本一茶全集』第一巻(荻原井泉水・羽田書店・昭和二十四年四月)



▲展示風景

種田山頭火 新発見資料

令和五年度に栃木県在住の牛久竹男氏より防府市が寄贈を受けた種田山頭火関連のはがき六点が、調査の結果、これまで知られていなかった資料であることが分かりました。

- ①昭和五年三月十三日付種田山頭火より原農平宛てはがき
- ②昭和五年三月十八日付種田山頭火ほか五名より原農平宛てはがき
- ③昭和五年四月六日付種田山頭火より原農平宛てはがき
- ④昭和五年九月十四日付原農平より種田山頭火宛てはがき
- ⑤昭和七年一月二十九日付種田山頭火より原農平宛てはがき
- ⑥昭和七年二月二十六日付石原元寛より原農平宛てはがき

これらの資料から、原農平と山頭火との交流をうかがうことができます。また、当時の山頭火の動向についてもうかがえるという意味でも貴重な資料です。

企画展「山頭火句集を繙く」では①③⑤⑥を公開予定です。

また①⑤の詳細については、『全国文学館協議会紀要』18号(全国文学館協議会発行)にて紹介しています。

# 今月の一句アーカイブ

山頭火ふるさと館では毎月山頭火の句を一句選んで皆様にご紹介しています。これまでにご紹介した「今月の一句」を振り返ります。

## 令和六年

### 十月 ふりかへらない道をいそぐ

昭和五年十月

九州を旅していた時期に詠まれた句。同年九月には日記類をすべて焼き捨て過去に捉われないよう己を諫めています。中島鬮牛児は山頭火が別れの際、振り返りなくなる気持ちを押さえて進む様子を後年の記事に書いており、この句からも独り旅を続ける山頭火の姿が想像できます。

## 十一月

### さみしい鳥よちよとなくかよよとなくかよ

昭和五年十一月

湯ノ原(大分県竹田市)から現在の「元天神山駅(由布市)付近に向かう日に詠んだ句。道中の豊かな自然や野鳥の囀りに感化されて詠んだものでしょう。「ちち」「こ」は鳥の鳴き声を人間の言葉に聞きなして、自身の寂しさと重ね合わせていたのかもしれない。

## 十二月

### けふの日までは生きて来た寒い風が吹く

昭和十二年十二月

十二月三日、自身の誕生日に小郡の其中庵

で詠んだ句。当日の日記と木村緑平に宛てた葉書には、誰も来ない其中庵で寂しく誕生日を過ごす寂しさを綴っています。二年前には自殺未遂を起こしており、「生きてきた」という言葉は生々しささえ感じられます。

## 令和七年

### 一月 捨てきれない荷物の重さまへうしろ

昭和五年一月

行乞を終えて熊本に戻って来た時期に詠んだ句。後に書かれた日記から、「荷物」の重さは執着の重さであることが示されています。一方で荷物は段々重くなっていくとも綴られており、逃れられない迷いや苦悩と向き合う山頭火の姿が想像できます。

### 二月 夜のふかうして薬缶たぎるなり

昭和九年二月

其中庵の時代に詠まれた句。当時は連日寝床から出られないと記すなど、精神面の落ち込みがありました。夜が更けても眠れず、囲炉裏にかけた薬缶の沸く音が響いていたのでしょうか。また、沸々と煮えたぎる薬缶は思い悩む山頭火の姿とも重なるかもしれません。

### 三月 「つちや」に寝てゐる月あかり

昭和八年三月

其中庵で詠まれた句。国森樹明と伊東敬治と共に過ごした後の日記に記されています。「つちや」には雑然としているさま、複雑な心境という意味があり、月あかりの差し込む部屋で友と過ごす日々の楽しさと己の抱える負の感情で板挟みになり苦しむ姿が想像できます。

# 今後の企画展情報

## 企画展「山頭火句集を繙(ひもとく)」

会期 前期：令和七年四月十一日(金)

後期：六月二十二日(日)

～六月二十七日(金)

～九月七日(日)

種田山頭火の俳句は現在一万句以上残っていますが、そのうちの七〇〇句程が句集『草木塔』に収められています。この企画展では、句集『草木塔』の元となった山頭火自選の七冊の句集について、どのように編まれたのか、そして七冊がどのような性格の句集なのか詳しく紹介します。

★種田山頭火関連の新発見資料を公開します。

## 企画展「現代によみがえる山頭火」

会期 令和七年九月十二日(金)

～十二月十四日(日)

種田山頭火がモチーフとして用いられている、現代のさまざまな作品、商品等を紹介いたします。

◆これまでのイベント◆

|     |        |   |     |          |                    |
|-----|--------|---|-----|----------|--------------------|
| 10月 | 5日     | 第3回山頭火ふるさとまつり<br>防府商工生によるスイーツ販売                       | 12月 | 1日       | 種田山頭火生誕記念イベント      |
|     | 5日     | 令和6年度書道コンクール表彰式                                       |     | 7日       | 第6回フォトコンテスト表彰式     |
|     | 6日     | 第3回山頭火ふるさとまつり<br>あつまれちびっ子！山頭火謎解きゲーム<br>朗読劇「山頭火の妻 サキノ」 |     | 18日      | 山頭火を学ぶ会            |
|     | 16日    | 山頭火を学ぶ会   |     | 21日      | 自由律句で遊ぼう           |
|     | 26日    | 自由律句で遊ぼう  |     | 25日      | 自由律句を学ぶ会           |
| 11月 | 13日    | 自由律句を学ぶ会  | 1月  | 11日      | 山頭火カルタで書き初め大会      |
|     | 16,17日 | コリントゲームで遊ぼう／山頭火おみくじ<br>(すごいぞ！防府 秋の大イベント)              |     | 8日       | 自由律句を学ぶ会           |
|     | 20日    | 山頭火を学ぶ会   |     | 15日      | 山頭火を学ぶ会            |
|     | 23日    | コリントゲームで遊ぼう   |     | 25日      | 自由律句で遊ぼう           |
|     | 30日    | 種田山頭火生誕記念イベント   |     | 2月       | 8日                 |
| 3月  | 12日    | 自由律句を学ぶ会  | 16日 |          | うめまつりスタンプラリー(～3/2) |
|     | 19日    | 山頭火を学ぶ会   | 19日 |          | 山頭火を学ぶ会            |
|     | 22日    | 自由律句で遊ぼう  | 22日 |          | 自由律句で遊ぼう           |
|     | 26日    | 自由律句を学ぶ会  | 26日 |          | 自由律句を学ぶ会           |
|     | 22日    | 自由律句で遊ぼう  | 26日 | 自由律句を学ぶ会 |                    |

◆これからのイベント (予定)◆

|    |     |                          |    |     |                         |
|----|-----|--------------------------|----|-----|-------------------------|
| 4月 | 2日  | 第7回フォトコンテスト作品募集(～10月31日) | 7月 | 9日  | 自由律句を学ぶ会                |
|    | 29日 | うめてらす誕生祭コラボ              |    | 16日 | 山頭火を学ぶ会                 |
| 5月 | 1日  | 第8回自由律俳句大会作品募集(～10月31日)  |    | 21日 | 親子でワークショップ「りんりんふうりんづくり」 |
|    | 18日 | 企画展関連講座「展示資料を繙く」         |    | 26日 | 自由律句で遊ぼう                |
| 6月 | 11日 | 自由律句を学ぶ会                 |    |     |                         |
|    | 18日 | 山頭火を学ぶ会                  |    |     |                         |
|    | 28日 | 自由律句で遊ぼう                 |    |     |                         |

山頭火ふるさと館報

第14号

令和7年4月1日発行

編集・発行

一般社団法人

防府観光コンベンション協会

山頭火ふるさと館

747-0032

山口県防府市宮市町5番13号

電話 0835-28-3107

FAX 0835-28-3113

駐車場

普通車用三台、身障者等用二台(ふるさと館横)  
無料観光駐車場二十五台(ふるさと館斜前)

アクセス

防府駅でんじんぐちから約一・五km  
まちの駅「うめてらす」から約一〇〇m

山陽自動車道防府東・西ICより約七分

※なお、特別企画展を開催する際、観覧料を設ける場合があります。

観覧料

無料

休館日

毎週火曜日(祝日の場合は次の平日)

十二月二十六日～十二月三十一日まで

午後四時三十分まで

開館時間

午前九時～午後五時

(ただし、特別企画展の開催中は、展示室への入室は

山頭火ふるさと館のご案内